

1920年代「狂乱の時代」の登場人物たち

間瀬幸江

Mase Yukie 宮城学院女子大学教授

第11回

彫刻家カミーユ・クローデルはどこにいたのか

「狂乱の時代」の立役者の1人で、作家兼外交官だったジャン・ジロドゥの作品に、『シャイヨの狂女』という演劇がある。市民から「狂女」と呼ばれ蔑まれる人物が、他の3人の「狂女」とたちと結託し、パリに巣くう「悪人」を一掃するという幻想譚であり、主人公の弁舌のポエジーに満ちた作品である。初演は1945年のパリ。前年ナチスからのフランスの解放を見ずに亡くなった作家の祈りが込められていると絶賛された。

カミーユ・クローデル(1864-1943)の小品《うちあけ話、またはおしゃべりな女たち》(1893-1897)は、寄り合う4人の女たちの話し声が聴こえてきそうな彫刻作品である。この作品の写真を目にした瞬間、『シャイヨの狂女』との何らかの関連を思った。しかし1893年、ジロドゥはまだ11歳であった。しかも彫刻家は1913年から亡くなるまでの30年もの間、弟であり作家兼外交官のポール・クローデルの判断で精神病院に幽閉されていた。

19歳で彫刻家ロダンに弟子入りしたクローデルは、ほだなくしてロダンと愛人関係となった。しかし彼の他の愛人との三角関係、妊娠と望まない中絶などを経て、10年続いた関係は破綻した。創作活動と感情生活をすべてロダンに搾取された彼女は、それを「搾取」とみなす常識がまだなかった時代にあって、現実には抗いながら創作を続けた。だが次第に精神の均衡を失い、唯一の理解者であった父の死後、病人として入院させられ、社会的自由を完全に奪われた。

世界中から若い才能が集ったきらびやかなパリの「狂乱の時代」は、男性優位社会に翻弄されたこの彫刻家が、自由と尊厳を根こそぎにされ、社会から消されたまま生きさせられた時代にすっかり重なっている

ことになる。今日では、評伝が書かれ、ロダンでも弟のポールでもなく彼女自身の視点を反映させた映画作品も制作され、さらには2017年に、彼女が10代を過ごしたオーブ県にカミーユ・クローデル美術館が開設されるなど、彼女の名誉回復の機運は、確かに形を取りつつある。しかしこうした「復権」によって私たちは、彼女を破滅に追いやった社会に対する批判的視座を、今日の人権意識のものさしで言語化する責任を、回避できてしまっている。

このやるせなさに直面するたびに私は、『シャイヨの狂女』の4人の「狂女」と、《おしゃべりな女たち》の4人の女たちの間には、資料上の接点がないとしても、なにか本質的なつながりがあると信じたくなる。ジロドゥはポール・クローデルを同業者の先輩としてよく知っていた。カミーユとは直接の知己でなかったとしても、彼は、ロダンの影響下を離れようとした時期の傑作と評された、あの彫刻に描かれた4人のことは知っていたのではないか。社会が耳を傾けなかった女性や子ども、高齢者たちの姿を見つめ、その声への尊重の思いを作品に記す真摯さにおいて、ジロドゥとカミーユは、似ていると思う。

本連載で取り上げてきたゼルダ・フィッツジェラルド、キキ・ド・モンパルナス、カミーユ・クローデル。女性の表現者たちから声を奪った社会を実証的に批判することばを持たない私たちは、せめて、この人たちの思いの記録、すなわち作品には、真摯に向き合いたい。そうすることで、作家に押し付けられた「悲劇」のレッテルを剥ぎ、作家自身の声と、作家が語り継ごうとした人々のありのままの声を、聴きに行きたい。

大修館書店『英語教育』2月号掲載
転載禁止

◆参考文献

アンヌ・デルベ『カミーユ・クローデル』
渡辺守章訳(文藝春秋社、1989年)



Les Causeuses ou Les Bavardes (おしゃべりな女たち),
Camille Claudel, 1897, Musée Rodin(部分)